

肢体不自由特別支援学校における自立活動

～ “からだ、に焦点を当てた事例から、自立活動の授業づくりを考える” ～

○齊藤博之

(山形県立ゆきわり養護学校)

KEY WORDS: 自立活動、授業づくり、からだ

1 目的

重度・重複障害のある幼児児童生徒が多数在籍する肢体不自由特別支援学校では、自立活動は重要な位置づけである。その反面、子どもの実態をどう捉えるか、指導目標をどう設定するか、どんな指導方法や内容で授業をするか、結果をどう評価するか等、自立活動の指導の困難さを訴える声も多い。在籍する子どもたちの多くは、運動発達につまずきや遅れ、偏りがあるため、定頸や坐位姿勢の安定、立位、歩行、移動、手の操作等といった運動発達の向上を課題とする指導が重要視される。併せて、医療的ケアを受ける子どもの増加もあり、健康の保持に関する内容も重要になる。これまでの事例研究等でも、姿勢や動作改善に伴い、認知や知能、心理的な問題、呼吸機能等の心身機能が改善した例が数多く報告されている。筆者も運動発達を含め、身体性が発達にとって重要な鍵を握るものと考えており、自立活動の授業では、一貫して動作法の理論と技法に基づき、“からだ、に焦点を当て指導してきた。その結果、認知発達や行動、心理的な側面、健康面で改善、変容した事例を多く確認してきた。本稿では“からだ、に焦点を当てた授業の事例から、その有効性を述べるとともに、問題状況の把握や見立て、課題設定、評価等といった、いわゆる授業づくりについて考えていきたい。

2 方法

(1) 事例の概要

対象者は特別支援学校高等部に通う1年生男子。脳性マヒ、知的障害、心臓疾患がある。期間はX年4月～X+1年3月。

(2) 授業づくりの構造

対象者の行動観察や、本人・保護者の希望等から、問題として取り上げる事象を自立活動の指導内容6区分26項目に照らし合わせ抜き出し、それらを動作法により見立て、課題を設定した。また、それぞれの問題や課題の関係性を整理するために関連図をつくった。指導は自立活動の「からだの学習」の授業(合計93回)で実施した。

(3) 問題状況の把握と見立て及び課題設定

① 自立活動の指導内容による整理

ここでは主要なものだけを抜き出す。〔健康の保持〕尿意を催すといつでもトイレに行きたがる。〔心理的な安定〕その場の状況に合わない行動をとることがある。「やったことがないのでできません」、「わかりません」と答える。〔人間関係の形成〕誰かが咳をすると「大丈夫?」と声をかける。大人とよく会話する。会話時に視線が合わない。視線の共有(共同注意)が極めて少ない。〔環境の把握〕対象物を注意して視られない。見本と同じ数字カードを選べない。上下左右が区別できない。〔身体の動き〕車いすで坐位姿勢はとれるが、右側に傾いていることが多い。車いすを自分で操作し移動する。腰や背、肩、股関節、膝、足首・足指に強い慢性緊張がある。話すときに頭を後ろ方向に反らせ頸や顔を強く緊張させる。車いすからトイレの移乗が一人でできる。〔コミュニケーション〕会話で意思の疎通ができる。吃音。平仮名・片仮名50音は読み書きできない。自分の名前が判別できない。1～9までの数字はだいたい読める。

② 動作の特徴(「からだの学習」1回目)

全身の動きが硬くぎこちない。〈胡坐で坐れますか〉と訊くと「やったことがないのでできません」と答える。胡坐坐位では骨盤が後傾して硬く動かない、股関節が開かず膝が立ったままで反る力が強い。膝がほぼ90度に曲がって伸びず、脚で踏ん張れない。「躯幹の捻り」課題では、自分では全く動かせず、教師が方向を伝えるために入れた僅かな負荷に対し強い抵抗の力が入る。不随意運動や随伴緊張・運動が顕著。

③ 見立てとしての動作特徴及び課題設定

課題に対し即座に抵抗を示すことから、現状固執や変化恐怖の強さが伺われた。他者の意図に対して生じる抵抗から、他者との共感的な交流体験の希薄さが感じられた。それらを踏まえ、中心課題として《慢性緊張の緩和と適度緊張による動作制御》と《自体軸の確立》の二つを設定した。〈自己一課題一他者〉の3項関係の構造をもつ動作法を適用することは共同注意の成立に効果的であろうと考えた。

3 結果

目立った変化を以下に示す。授業の3回目から「躯幹の捻り」で緊張に当たっても待てるようになり、「気持ちいい」と言うなど、自体感がはっきりしてきた。6回目から不随意的な動きが減った。日常では注視が増え、カレンダーに印をつけると当日の数字を間違えずに指せるようになった。腰の慢性緊張が緩和され、X年6月、13回目から車いすに坐ったまま装具を一人で脱げるようになった。口癖だった「わからない」「できません」は言わなくなった。15回目のときに、〈今どこを動かしているか〉と訊くと、「腰です」等と的確に答えられるようになった。この頃からカレンダーの当日の数字を見て、同じ数字のカードを3枚の中から選べるようになった。17回目から膝立ち課題を導入。教師の他動援助で膝頭に体重を乗せる体験をした。次の日には、脚にググッと力が入るようになった。1週間後の19回目には一人で膝立ち位がとれた。呼吸動作では横隔膜の動きが円滑になり、深くリズムカルな呼吸になってきた。7月に入り21回目以降には椅子坐位等でタテ真っ直ぐの力が確かになってきた。周囲の人に吃音が目立たなくなったと言われるようになった。教師との視線の共有ができるようになった。会話時の視線も合うようになった。X+1年1月からは、日付の数字カード選びで、選択肢を6枚にしても正確に選んで読めるようになった。3月に入ってすぐに、母親から挨拶の際の吃音がなくなったとの報告があった。

4 考察

“からだ、”は、生徒が自身の課題遂行に対する努力過程を評価しやすい。また、運動発達だけでなく、概念形成や認知発達、心理的な問題、対人関係の形成等の種々の発達を促進する。自立活動の指導の難しさを解消する要素のひとつとして、“からだ、”と発達の関係について理解することが考えられる。このことは、自立活動の指導内容それぞれを関連付ける作業に効果をもたらすであろう。教師が「本当にこれでよいのだろうか」と指導に自信がもてないことも難しさの要因にある。これについては、教員一人一人の専門性の向上を追求しつつ、複数人で意見交換をしたり、校内人材を活用したりする工夫が必要であろう。(SAITO Hiroyuki)

※研究発表に関し、本人・保護者等の承認を得ています。